

# 人新世の「資本論」

人新世 [ひと・しんせい] 人類が地球を破壊しつくす時代  
気候変動、コロナ禍…。文明崩壊の危機。唯一の解決策は潤沢な脱成長経済だ。

2021年新書大賞第1位  
斎藤幸平 集英社新書

(はじめに) SDGsは「大衆のアヘン」である！温暖化対策として、あなたは、何かしているだろうか…。温暖化対策をしていると思ひ込むことは真に必要とされているもっと大胆なアクションを起こさなくなってしまう、その善意は有害でさえある。

SDGsはアリバイ作りの様な物で目下の危機から目を背けさせる効果しかない。現実には私達人間が地球の在り方を取り返しがつかないほど大きく変えてしまっている、ということだ。

ノーベル化学賞受章者のハウル・クルツェンは「人新世」と名付けた。人間達の活動の痕跡が地球の表面を覆い尽くした年代という意味である。実際、ビル、工場、道路、農地、ダムなどが地表を埋め尽くし海洋にはマイクロ・プラスチックが大量に浮遊している。人工物が地球を大きく変えたのだ。産業革命以降とりわけ飛躍的に増大しているのが空気中の二酸化炭素である。400 万年前の地球の平均気温は 2~3 度 c 高く海面は最低でも6m 南極などの氷床は融解していた。産業革命以前は 280ppm だった大気中の二酸化炭素の濃度は、ついに南極でも 400ppm を超えてしまった。人類が築いてきた文明が、存続の危機に直面している事は間違いない。このような事態を避けるためには政治家や専門家だけに危機対応させてはいけない。

正しい方向を突き止めるために本書はマルクスの資本論を参照しながら 150 年ほど眠っていたマルクスの思想の全く新しい面を「発掘」し、展開することで気候危機の時代に、よりよい社会を作り出すための想像力を解放してくれるだろう。

第1章 **気候変動と帝国的生活様式**～ノーベル経済学賞の罪～2018 年に受賞したイエール大学ウィリアム・ノードハウスの専門分野は気候変動の経済学で批判の俎上に載せられたのは 1991 年に発表した論文であった、彼が提唱した二酸化炭素削減率では地球の平均気温は 2100 年迄になんと 3.5 度 c も上ってしまう(2016 年に発効したパリ協定では 2 度 c 未満)

▼ポイント・オブ・ノーリターン～2020 年 6 月にシベリアの気温が 38 度 c に達した、永久凍土が融解すれば大量のメタンガスが放出され気候変動はさらに進行する、その上、水銀が放出したり、炭そ菌やウイルスが解き放たれたりするリスクもある。平均気温は既に1度 c 上昇しているので 2100 年迄に 1, 5 度未満に抑え込まなければならない。今すぐ行動に移して 2030 年迄に半減、2050 年迄にはゼロにしなければならない。

▼日本の被害予測～2018 年の西日本の豪雨による被害総額は 1,1 兆円でこの規模

の被害は既に毎年起きるようになっており、その確率は更に高まっていく。

日本は二酸化炭素排出量が世界で5番目に多く、上位5ヵ国で世界全体の60%近くを排出している。将来世代に与える影響の大きさを考えれば私達現役世代が無関心でいることは許されず今こそ「大きな変化」を求め行動を起こす必要がある。

そして、本書が最終的に掲げたい「大きな変化」とは資本主義システムそのものに挑む事である。その前に環境危機の原因につきキチンと考える必要がある。

▼グローバル・サウスで繰り返される人災(グローバル化によって被害を受ける領域並びにその住民で資本主義の矛盾が影響を与えている)グローバル・ノースに於ける大量生産・大量消費が代償を押し付けている。

バングラデシュで生産される綿花は40°Cの酷暑の中で作業を行う貧しいインドの農民である、農民は遺伝子組み換え品種の種子と化学肥料、除草剤を毎年購入しなくてはならない、干ばつや熱波のせいで不作になれば借金を抱え自殺に追い込まれることも少なくない。

▼労働者も地球環境も搾取の対象～人間を資本蓄積の道具として扱う資本主義は自然も又単なる略奪の対象とみなす。

このような社会システムが、無限の経済成長を目指せば、地球環境が危機的状況に陥るのは、いわば当然の帰結である。

▼加害者意識の否認と先延ばしの報い～帝國的な生活様式は一層強固なものとなり、危機対応は未来に先延ばしされ、それによって私達の一人一人がこの不公正に加担することになる、だがその報いが遂に気候危機として中核部に忍び寄ってきている。

スウェーデン人の環境活動家グレタ・トゥーンベリは当時15歳の高校生で政治家達が人気取りの為に「環境に優しい恒久的な経済成長の事しか語らない」事を厳しく批判した(2018年COP24国連会議)世界中の若者達は熱狂的に彼女を支持した。

▼マルクスによる環境危機の予言～19世紀半ばにマルクスが資本主義は自らの矛盾を別のところに転嫁し、不可視化する、だがその転嫁によって、更に矛盾は深まっていく泥沼化の惨状が必然的に起きるであろうと。

▼技術的転嫁～生態系のかく乱

▼空間的転嫁～外部化と生態学的帝国主義

▼時間的転嫁～「大洪水よ、わが亡き後に来たれ！」

▼周辺部の二重の負担～南米チリでは欧米人のためアボガドを栽培のため大量の水が必要で自分達の生活用水や食糧生産を犠牲にしてきた、そのチリを大干ばつが襲い深刻な水不足を招いている。そこに新型コロナウイルスによるパンデミックが追い打ちをかけた。

▼資本主義よりも前に地球がなくなる！

～アメリカを代表する環境活動家ビル・マッキベンの発言～

▼可視化される危機～中国やブラジルなど外部化の受け皿となっていた国々も急速

な経済発展を遂げ、外部化や転嫁の余地は急速に萎んでいる。

先進国内部での労働者の搾取は激化している。

ヨーロッパではシリア難民が大きな社会問題となりシリア内戦も原因の一つは気候変動だと云われている。EUも押しよせる難民をトルコに押し付けている。

アメリカでも押し寄せる環境難民を断固拒み、メキシコとの国境に壁を建設中である。

▼大分岐の時代～外部化が出来なくなれば資本蓄積は出来なくなる、外部の消尽が起きた今こそ歴史の分かれ目だと。

## 第2章 気候ケインズ主義の限界

▼グリーン、ニューディールという希望？～バーニー・サンダース等の世界に名だたる政治家達も選挙公約に掲げ大型財政出動や公共投資を行い有効需要を増やし景気刺激を目指す、だが果たしてそんなうまい話があるのか問題点を検証していきたい。

▼「緑の経済成長」というビジネスチャンス～気候変動を好機としてこれ迄以上の経済成長を続けることが出来るかもしれないという希望

▼SDGs—無限の成長は可能なのか？～果たして地球の限界と相容いれるのかどうか、やがて地球の限界を超えてしまうのではないか。

▼プラネタリー・バウンダリー(地球の限界)～その閾値を9項目に分けて計測、見極める「気象変動」「生物多様性の損失」「窒素・リン循環」「土地利用の変化」「海洋酸性化」「淡水消費量の増大」「オゾン層の破壊」「大気エアロゾルの負荷」「化学物質」による汚染からなる。

▼成長しながら二酸化炭素排出量を削減できるのか～環境学者ロックストロームらの測定によれば気候変動や生物多様性等4項目は既に地球の限界を超えてしまっている。2019年に自己批判し経済成長か、気温上昇1,5%未満の目標か、どちらか一方しか、選択の余地なし。

▼絶対量で二酸化炭素を減らさなければ気温上昇に歯止めをかけることはできない、今すぐにも年率10%前後のペースで削減の必要あり！

▼生産性の畏～資本主義は経済成長を諦めることはできない「生産性の畏」からも抜けだせない。資本主義の限界に気づき始めている。

▼デカップリングは幻想～イギリスの有名な環境経済学者であるティム・ジャクソンのベストセラー2017年「成長なき繁栄」によればアメリカやイギリスでは1980年と比較して40%の大幅な改善が見られOECD加盟国もエネルギー消費率は大幅に下がっている。ところがブラジルや中東では対実質GDP比率でのエネルギー消費率が急速に悪化している、経済成長の中心が中国やブラジルに移った為に世界規模で見ると2004年から2015年の間、排出割合は僅か0,2%しか改善していない。

▼富裕層が排出する多量の二酸化炭素～2019年に1万人を超える科学者達が「気候変動は裕福な生活様式の過剰消費と密接に結びついている」事を訴え既存の経済メカニズムから抜本的に転換する必要性を唱えた(世界の富裕層の10%が酸化

炭素の半分を排出)

▼電気自動車の本当のコスト～2019年に吉野彰がノーベル化学賞を受けたリチウムイオン電池はスマホやノートパソコンだけでなく電気自動車にも不可欠で、その製造には様々なレアメタルが大量に使用される、当然リチウムも必要でリチウム採掘は地下水を蒸発させることで採取されるので地下水のくみ上げと同義である、大量に汲むので生態系に大きな影響を与え住民達の淡水量の減少を引き起こす。

▼人新世の生態学的帝国主義～リチウムやコバルトだけでなく鉄や銅やアルミニウムの需要もGDPの増大に合わせて増え続けている。鉱物、鉱石、化石燃料、バイオマスを含めた資源の総消費量は1970年に267億トンが2017年には1000億トンを超え2050年には1800億トンになるという、一方リサイクルされるのは僅か8,6%しかない。

▼技術楽観論では解決しない～2040年迄に電気自動車は現在の200万台から2億8千万台に迄伸びるといふ、ところがそれで削減される世界の二酸化炭素排出量は僅か1%と推計されているのだ。

▼空気中から二酸化炭素を除去する新技術？～NETの代表例であるBECCSも問題含みだ。「転嫁」を大規模に行うだけの技術なのだ。

▼脱成長という選択肢～その際に重要な問題はどのような脱成長を目指すべきか、という事である。

( 続く )